

COVID-19 55日間で学んだこと (パリ通信 101号)

5月11日。マイヨット海外県を除き、3月17日から8週間続いた長い外出禁止がようやく解除された。

抜ける青空に輝く太陽

が春を告げると同時に、何の準備もなく、突然の緊急事態にあつという間に日常生活が遮断されてしまった。1日1回、自宅から1km以内、1時間以内の生活必需品買出しが許可される日々が続いた。

劇的に増えていく感染者と死者数、いつ感染するかも知れない、無症状保菌者として知らずに周りの人にうつしてはいないだろうか、自粛はいつまで続くのか、様々な不安、疑問、不信感、恐怖感に襲われた。

パリの街から人も車も消え、非現実的な静寂に満ちた奇妙な空間と時間。テレビやネットに溢れる情報に一喜一憂し、時間はあっても何もできない日々。4月13日マクロン大統領テレビ演説で5月11日の外出禁止解除が提示されたときから、事態を受け入れる心の余裕ができた。

手帳に書き込む予定はなく、先がまったく見えない不安から、目標となる出口が見えたことで、解除されたら何をしようかと未来に自己投影ができるようになった。揺らいでいた今という時間が再び意味を持ち、不自由に耐えることができた。

「段階的」「地方別」の外出禁止解除に際して、フランス全土を構成する101の県が赤と緑の2ゾーンに分けられた。パリやフランス東部・北部は「赤ゾーン」(32県)、フランス西部と南部は「緑ゾーン」(69県)、「ウイルスの流行」「救急医療の受入れ能力」「PCR検査の能力」の3つを基準に赤と緑に分かれる。



メトロやバス、公共交通機関内マスク着用義務を記したステッカー

ゾーンに関係なく、自宅から100km以内は証明書なしで移動が可能になる。10人未満の集まりも許可される。ゾーンで異なる点は (1) 公園、庭園、森林、海岸への立入が赤ゾーンでは引き続き禁止、 (2) 緑ゾーンのみでの中学校開校、小学校は全国で11日の週から段階的に再開され、中学校は18日の週からの予定である。ただし、父兄は子供を学校に行かせないこともできる。また、各市町村の判断で安全対策ができない学校は開校を見送ることができる。

高校・大学は9月までオンライン授業が確定している。海岸がある県(すべて緑ゾーン)では、海岸を開放するかは市長と県知事の判断に委ねられる。

感染のぶり返しが最も心配されるのが首都圏を始めとする大都市である。

駅の構内、メトロ、バス、TGVなど公共交通機関内でのマスク着用義務(違反135€)、石鹸での手洗い(その環境がない場所では消毒用ジェル)、最低1mの安全距離確保は、コロナウイルスと人間生活の共存の鍵になる。

外出禁止直前に地方へ疎開した200万人(首都圏人口の17%)が徐々にパリに戻ってくる。幸い地方の医療崩壊には繋がらなかったが、首都圏のメトロ、RER、バス、トラムをいかにコントロールするか(できるか)は感染のぶり返しを抑える鍵である。パリのメトロ利用者は一日400万人と言われ再発の巣になる可能性が高い。朝夕のラッシュアワー時(6:30-9:30/16:00-19:00)は雇用主の証明書がないと公共交通機関には乗れない。メトロ数も通常の75%で途中止まらない駅も多い。テレワーク、時間差出勤、自転車通勤など少しでも公共交通機関を使わずに仕事に復帰する努力をしているが、安全距離確保が可能かどうか心配されている。

感染の拡がり方、予防手段、一人暮らしや介護施設の高齢者を助ける連帯、個人の倫理と責任を55日間で学んだ。経済破綻とのバランスを考えると、リスクはあっても解除を試みるしかない。COVID-19と人間生活の共存への道のりは長く、今そのスタート地点に立った。今度は有効に闘う準備もできたと思う。6月2日という次の目標(閉鎖されたままのレストランやカフェ、映画館、文化施設の再開見通し発表)に向かって、この3週間を何としても成功させたい気持ちがフランス国民を繋いでいる。



<いつもはパリ市民の憩いの場のカフェもひっそりと門を閉ざしています>